

平成26年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	被災地（「東北地方太平洋沖地震」）に暮らし続ける人々の経験と記憶に関する実践的研究
------	---

研究代表者

氏名 水津 嘉克	所属 地域研究分野	職名 准教授
-------------	--------------	-----------

研究分担者

氏名 出口雅敏	所属 地域研究分野	職名 准教授
橋村修	地域研究分野	准教授

【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）

本研究は、2011年度から東京学芸大学・学内重点研究費の助成を受けて出口・橋村・水津で進めてきた「東北地方太平洋沖地震」に関する調査・研究を、これまでの反省を踏まえた上で継続したものである。

当初、水津（社会学）と橋村（民俗学）で始めたこの研究は、その後出口（人類学）が加わり、震災からしばらく各学会がまるで「震災バブル」のように沸き立っている状況のなか、学問の枠を越えて、長期的に冷静な目を保ちつつ、現地での調査データをもとに報告書を作成することを目的としてきた。

今年度も、橋村は「漁業者の震災津波時の『沖出し』行動とその評価」、出口は「震災報道・日本研究・アイドル ―フランスから見えてくるもの―」、水津は「震災弱者と自死に関する論考 ―震災支援の今後を見据えて―」という内容で報告書を作成し、それぞれの専門に引きつけたかたちで、4年目に入ろうとしている震災・被災地に関して考察を行っている。

しかし、本年度に関しては、橋村報告以外は、被災地での調査データ収集を行い、それを論考に反映させているかに関しては大いに反省点が残るものになったことを認めなくてはならない。

被災地や被害を受けた人たちに関する調査・研究は短期間で終わるべきものでもないし、実際それは不可能だと研究者は自覚すべきであろう。阪神淡路大震災から20年たっても、様々な問題が被災地にはあり続けていること、そして亡くなった方々に対する遺族の思いが決して消えるものではないことにそれは現れている。

その意味でいうならば、本年度の報告書の反省点を十分にふまえ、3人それぞれが今後も被災地へ視線（被災地での現地目線）と研究を継続していくことが何よりも重要な課題であり、同時に震災をテーマに重点研究を4年間続けてきた成果であると考ええる。

また2011年からの本研究期間中、水津と橋村共同で調査地に出向いたことも数回あり、学問分野が異なるとなかなかフィールドを共にすることがない現実のなかで、それぞれ得るものがあつたと考えている。

しかし、それは研究者側の勝手な事情であり、問題はこの報告書が被災地での現実には何らかのかたちで寄与することができたかどうかであると考えるが、その点に関してはやはり現時点ではかなり心許ないといわざるを得ない。

震災から4年たち被災地の人びとが求めているものは変化・多様化しつつある。それはこれからも変化していくであろうし、それらは原発の問題を含め簡単に答えが出ないものの方が多いだろう。そのために一番重要なことは、われわれ人文社会科学系の研究者が常に震災のことを意識しながら今後も研究を進めていくことではないかと考える。

そのための一里として、本報告書を位置づけたい。

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

作成した報告書は、各教員が授業内などで使用する。

また、各教員が所属する研究会（水津の場合は7月25日開催予定の調査実践研究会など）で、内容に新たな情報を加えたいえ、報告を行っていく予定である。